

仙台市文化財調査報告書第177集

宮城県仙台市

郡山遺跡

——第94次発掘調査報告書——



1993・6

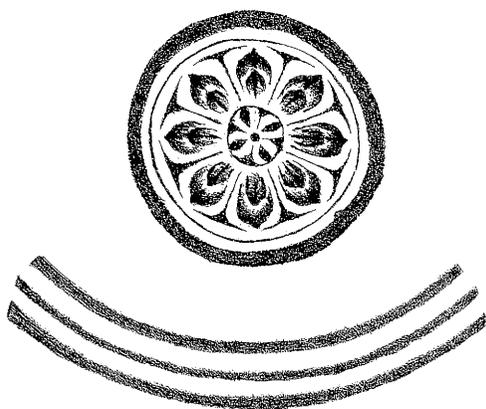
仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第177集

宮城県仙台市

郡山遺跡

——第94次発掘調査報告書——



1993・6

仙台市教育委員会

序 文

郡山遺跡は古くから瓦や土器が出土する所として知られ、仙台市内にある著名な遺跡の一つであります。しかし近年都市化の影響を受け、宅地造成や大規模な開発が急速に進展しつつあります。今回の第94次調査も宅地造成に伴う発掘調査として実施したものであります。

郡山遺跡は昭和54年に初めて発掘調査が実施され、昭和55年からは国庫補助事業による緊急範囲確認調査も実施されております。これまで多くの成果を上げ、材木列と大溝により方四町の広範囲に区画された古代の官衙（役所）跡であることがわかってきました。またそれより古い時期の役所の存在も明らかとなってきております。これらの造られた年代は7世紀後半に遡り、多賀城創建以前の古代東北の歴史を解明する上で貴重な遺跡と言えます。

さて仙台市域にはこのような先人の残した貴重な文化遺産が多数埋蔵されています。私たちはこれらを市民共有の文化遺産として永く後世に継承するとともに、活用していくことが重要な責務と考えております。そのためには市民の方々の深い御理解と御協力が不可欠であることはいうまでもありません。

今回の調査や報告書の作成にあたっては、地権者安齋善治氏をはじめ、多くの方々に御協力をいただきました。ここに心より深く感謝申し上げ、刊行の御挨拶といたします。

平成5年6月

仙台市教育委員会
教育長 東海林 恒 英

例 言

1. 本書は郡山遺跡の第94次調査の発掘調査報告書である。
2. 本調査の経費は、地権者安齋善治氏の負担による。
3. 本報告書の作成にあたり次のとおり分担した。

本文執筆	長島榮一
遺構トレース	菅井百合子、日比野園子
遺物実測	小佐野章子、菅家婦美子、吉田りつ子
遺物トレース	菅井、日比野
遺構写真撮影	長島榮一
遺物写真撮影	稲葉俊一
遺物補修復元	赤井沢千代子、洞口れい子
図版作成	永田英明

編集には長島と永田があたった。
4. 遺構図の平面位置図は相対座標で、座標原点は任意に設置したNo1原点 ($X = 0$ 、 $Y = 0$) とし、高さは標高値で記した。
5. 文中で記した方位角は真北線を基準としている。
6. 遺構略号は次のとおりで、全遺構に通し番号を付した。

SA 柱列跡・塀跡	SE 井戸跡	SX その他の遺構
SB 建物跡	SI 竪穴住居跡・竪穴遺構	P ピット・小柱穴
SD 溝跡	SK 土坑	
7. 遺物略号は次のとおりで、各々種別毎に番号を付した。

A 縄文土器	D 土師器 (ロクロ使用)	G 平瓦・軒平瓦
B 弥生土器	E 須恵器	H その他の瓦
C 土師器 (ロクロ不使用)	F 丸瓦・軒丸瓦	N 金属製品
8. 出土遺物の記述の中で土師器について、特に断りのないものは全てロクロを使用していないものである。
9. 本書の土色については「新版標準土色帳」(小山・佐藤：1970)を使用した。

目 次

序 文

例 言

目 次

調査要項

I 調査に至る経過	1
II 遺跡の位置と環境	3
1. 地理的環境	3
2. 歴史的環境	4
3. 郡山遺跡の概要	4
III 第94次調査	6
1. 調査経過	6
2. 発見遺構と出土遺物	6
3. ま と め	15
写真図版	17

調 査 要 項

遺 跡 名 : 郡山遺跡 (仙台市文化財登録番号C-104)

遺跡所在地 : 仙台市太白区郡山2～6丁目

第94次調査地 : 仙台市太白区郡山5丁目214他

調 査 期 間 : 発掘調査 平成4年4月3日～平成4年4月24日

整理作業 平成5年4月14日～平成5年5月31日

対 象 面 積 : 1328㎡

調 査 面 積 : 116㎡ (宅地造成に伴う道路部分)

調 査 主 体 : 仙台市教育委員会

調 査 担 当 : 仙台市教育委員会社会教育部文化財課

調査第一係 主事 長島榮一

地 権 者 : 安齋善治

調 査 参 加 者 : 伊勢みつ、伊藤貞子、大友節子、小佐野章子、小嶋登喜子、小沼佳代子、小池房子、佐々木直子、佐藤栄子、菅井百合子、高橋ヨシ子、千田あや子、日比野園子、洞口れい子、牧かね子、吉田りつ子

整 理 参 加 者 : 赤井沢千代子、小佐野章子、菅井婦美子、菅井百合子、永田英明、日比野園子、洞口れい子、増田瑞枝、吉田りつ子

調 査 協 力 : 安齋善治

櫻田 隆事務所 (菅野 徹)

エス・ディー・ホーム (遊佐玉治)

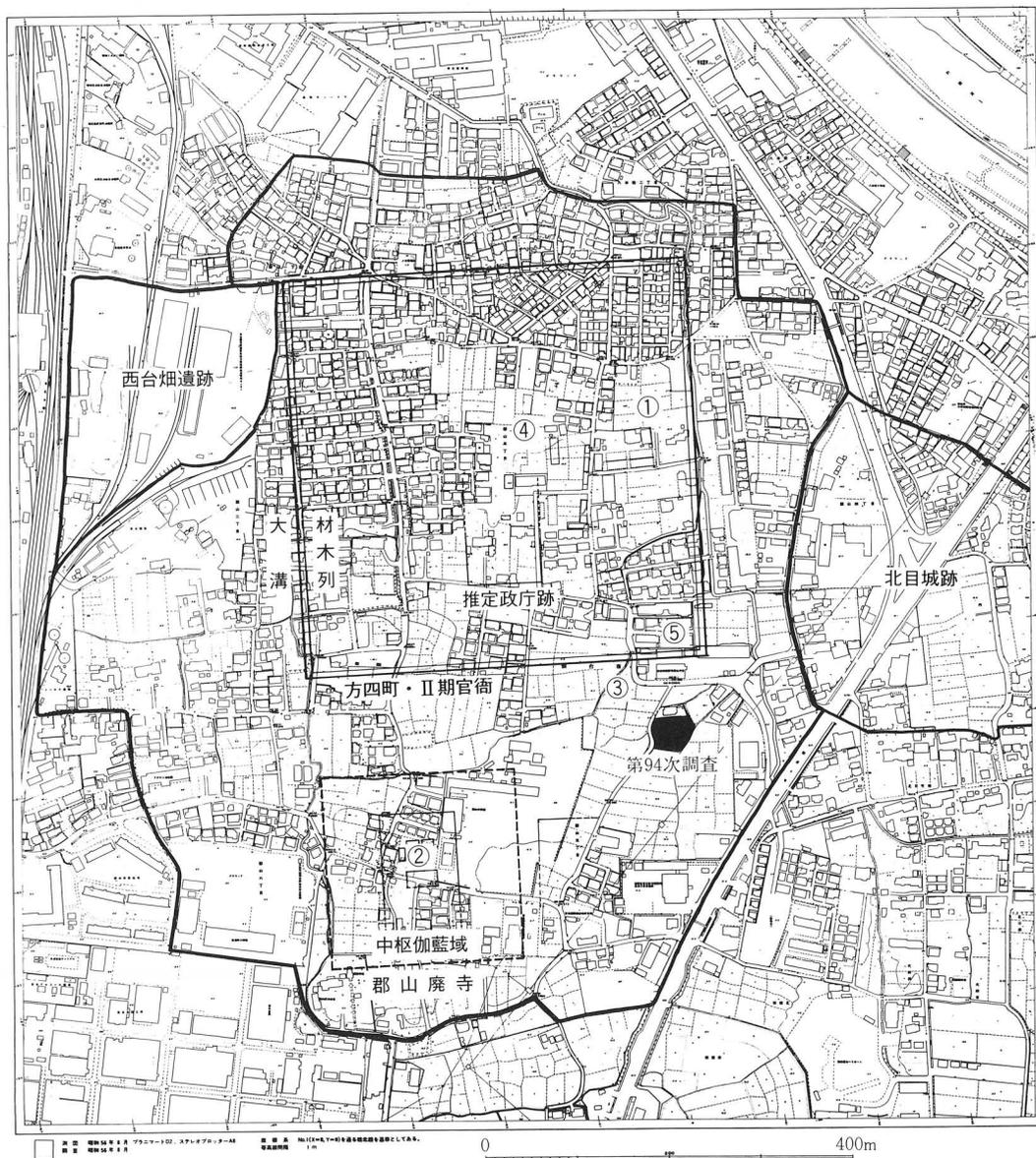
I 調査に至る経過

はじめて郡山遺跡が注目されたのは、大正3年（1914）宮城県図書館長であった山中樵の発見によってである。当時長町駅の東に煉瓦工場があり、郡山周辺から粘土を採取していた。その際に遺物が出土し、漆が入ったままの須恵器平瓶が発見された。そこで『考古学雑誌』第5巻第5号に「漆液を容れたる陶器」（註1）という報告を寄せ、名取郡衙の可能性を指摘している。現地での聞き取りによれば平瓶の出土地点は第1図中の①付近であると推定される。また東北大学嘱託であった内藤政恒は昭和13年（1938）『寶雲』22冊に「東北地方発見の重瓣蓮花文鍔瓦に就いての一考察（下）」（註2）を発表し、郡山遺跡出土の軒丸瓦を多賀城跡出土の瓦より新しいものとして平安時代の中ごろの年代を与えている。そこに紹介された瓦は昭和49年（1974）に出版された『東北古瓦図録』（註3）にも載せられている。

昭和24年になると東北大学教授伊東信雄は、諏訪神社北方の地点（第1図②）で瓦が多量に出土した状況を写真撮影している。この頃に採集したと考えられる瓦が東北大学に所蔵されており、昭和57年（1982）に出版された東北大学文学部の『考古学資料図録』（註4）に軒丸瓦と鷗尾が載せられている。その発見を伊東は昭和25年（1950）『仙台市史』第3巻別編1において「郡山古瓦出土地」（註5）として掲載し、相伴している土器から瓦の年代を平安初期を降らないものとし、遺跡を平安初期の寺院跡と推定している。また同じ市史の中で「北目古代聚落址」（註6）として遺跡の東南部（第1図③付近）を付図で示し、古墳時代末期の遺物を出土すること、明治の末から大正のはじめにかけて発見されていることを指摘し、さらに大正年間の山中樵による考古学雑誌での報告を抄録している。

仙台市では文化財分布図を作成し、昭和53年までは諏訪神社北方の一部を郡山遺跡としてきた。その後、遺物の散布状況から第1図④付近を郡山三丁目遺跡として追加登録している。昭和54年には郡山三丁目205、206（第1図⑤）において宅地造成のための開発計画が申請され、発掘調査を実施した。それにより掘立柱建物跡、竪穴住居跡、土壇などとともに多量の土器や硯が出土し、7世紀末から8世紀初頭の高賀城以前の官衙跡（役所跡）との見方が強まった。この成果にもとづき仙台市教育委員会では郡山遺跡の登録範囲の拡大を図り、郡山三丁目遺跡を含めてほぼ現在の範囲となっている。そして昭和55年度からは国庫補助事業として遺跡の範囲と性格を究明するための発掘調査を実施してきた。

こうした状況のなか平成4年1月太白区郡山字穴田西10-1安齋善治氏より、郡山五丁目214他において宅地造成のための発掘届が提出された。安齋氏との協議の結果、下水道管などの埋設物が遺構を損なわないよう施工することで諒解が得られた。したがって遺構の確認を目的とした事前調査を実施した。



第1図 郡山遺跡全体図

II 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境

仙台市東南部の地形は、西半部と東半部で大きく異なっている。西半部は奥羽山脈から派生する七北田丘陵、青葉山丘陵、高館丘陵と広瀬川の形成した段丘からなっている。段丘は古期から青葉山段丘、台ノ原段丘、上町段丘、中町段丘、下町段丘と呼ばれている。仙台市の市街地は江戸時代以降この上町段丘から下町段丘の上に形成されている。

東半部は海岸線より幅10kmの「宮城野海岸平野」と言われる沖積平野である。北は宮城郡七ヶ浜町から南は亶理郡山元町まで、南北40km程の三日月形に広がっている。流域には扇状地、自然堤防、後背湿地、旧河道などの地形が複雑に入り組んでいる。さらに現在の海岸線より奥に4～5列の浜堤も形成されている。広瀬川と名取川に挟まれた範囲を郡山低地、広瀬川以北を震ノ目低地、名取川以南を名取低地と呼んでいる。

郡山遺跡の立地するのは郡山低地の東寄り、標高8～11mの自然堤防と後背湿地上で旧河道も観察される。とくに遺跡の南側には比高差1～2mの顕著な旧河道がみられる。



第2図 郡山遺跡位置図

2. 歴史的環境

郡山遺跡周辺では縄文時代後期後半から近世にかけての遺構、遺物が発見されている。郡山遺跡第65次調査では官衙を検出した層の下層から縄文時代後期後半の瘤付き土器が出土している。また西に隣接する西台畑遺跡からは縄文時代後期初頭の遺物が出土している。弥生時代では郡山遺跡第65次調査で弥生時代初頭の遺物や中期中葉（榊形囲式）かそれ以前にさかのぼる水田跡が発見されている。また隣接する西台畑遺跡からも榊形囲式の土器や土壇墓も発見されている。この他に郡山遺跡第13、44、65、85、91次調査などで弥生時代中期頃の土器が出土している。古墳時代では郡山遺跡第31次調査で古墳時代中期の土師器が出土し、第89次調査では埴輪片が出土している。古墳時代の終末から奈良時代の初めにかけては郡山遺跡が官衙として機能した時代である。この時期に遺跡の北西2 km程の大年寺山の周辺には茂ヶ崎横穴墓群、宗禅寺横穴墓群、二ツ沢横穴墓群などが造られる。

平安時代以降になると遺構数は減り、第65、84次調査で水田跡が発見されたほかは、第55、62次調査で掘立柱建物跡や竪穴遺構などが若干発見されているだけである。中世になると郡山遺跡内ではまとまって小柱穴が発見されている地点がある。郡山遺跡の東には天文年間（1530～50）まで栗野大膳の居城といわれる北目城跡があり、慶長5年（1600）には伊達政宗も一時入城している。北目城跡の周辺には室町時代の板碑や「館ノ内」、「出丸」、「矢来」、「矢口」などの地名が残されている。

江戸時代以降明治時代までは奥州街道沿いの長町に接しながらも、農村的な姿を留めていたようである。明治22年（1889）上野一塩釜間の鉄道が開通すると西側で長町地区と分断され、昭和40年代に国道4号線仙台バイパスが開通するまでは大きな変化はなかったようである。

3. 郡山遺跡——官衙（役所）跡——の概要

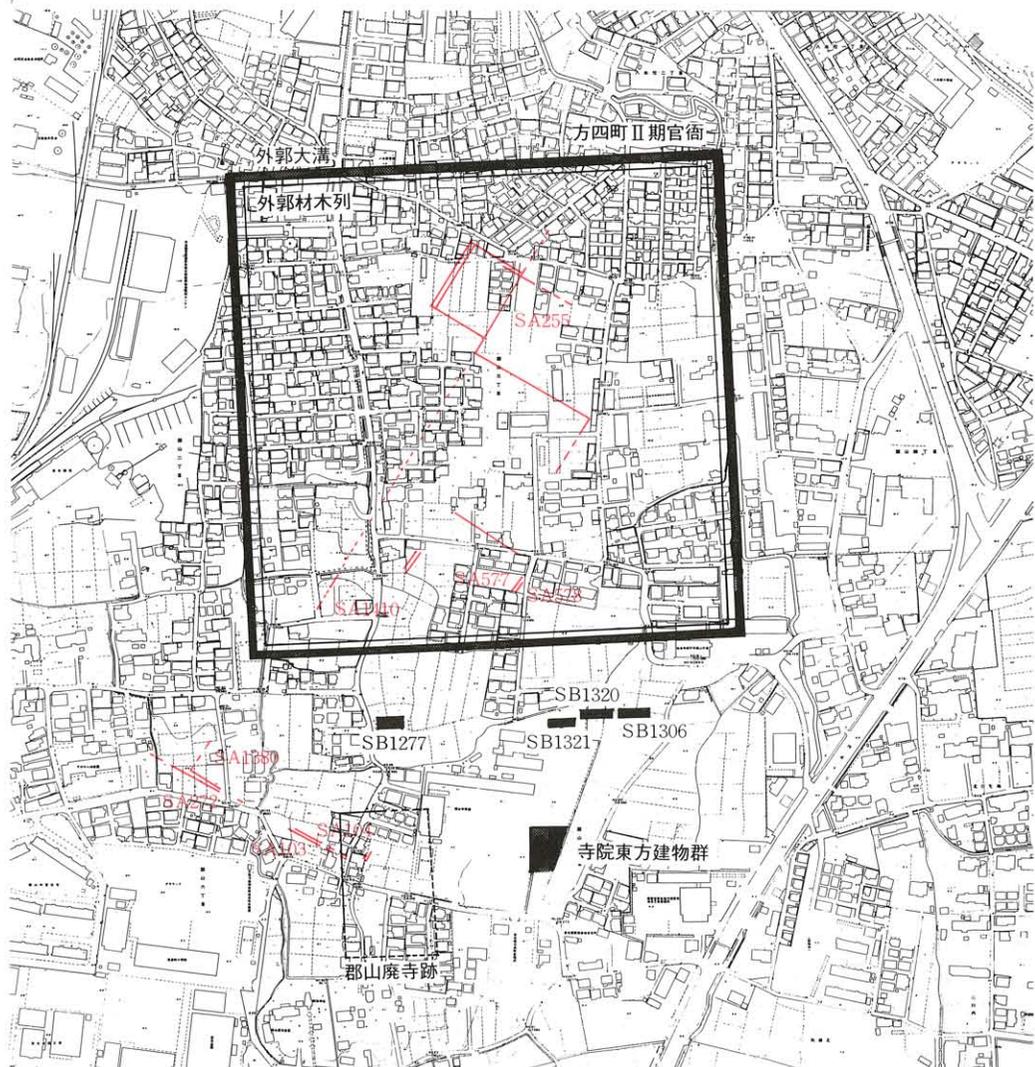
郡山遺跡からは2時期の官衙（役所）跡が見つかっている。7世紀後半の古い時期の官衙を「I期官衙」、I期官衙に引き続き8世紀初めまでの新しい時期の官衙を「II期官衙」と呼んでいる。

I期官衙は南北600m、東西400m以上にわたって広がっている。材木列や板塀で区画されたブロックが連なって構成されている。ブロックによって総柱建物跡による倉庫群、規模の大きな建物による官衙建物群、竪穴住居跡による竪穴群など機能の違いによりまとまっている。ブロックにより建物や塀の基準方向は違いがあり、真北より東へ30～40°程振れている。

諸施設がその機能ごとにまとまって「院」を形成していることから郡衙（評衙）とも考えられるが、全体規模が大きい点、畿内系の土器が存在する点から中央直轄の国衙、城柵の可能性もある（註7）。

Ⅱ期官衙はⅠ期官衙を取り壊したのち、同地に造営されている。東西428.4m、南北422.7mのほぼ正方形に材木列と大溝をめぐらし外郭とし、内部に建物を配している。外郭南辺中央に南門と各所に櫓状建物が付いている。中枢部分では四面廂付建物や石敷き広場の他に、地方官衙唯一の石組み池などが発見されている。官衙の周辺にも大規模な建物やまとまりを持った建物群があり、官衙の南方には大規模な伽藍を有する寺も建てられている。これらの官衙や寺院は真北を基準として規格的に造営されている。

外郭の規模、構造から典型的な城柵とみられる。出土遺物から陸奥国府多賀城とは年代的にほとんど重複は認められず、多賀城が創建されたと考えられる養老～神亀（717～728）年間頃には廃絶したとみられる。また極めてにかよった伽藍配置の寺院を併設している事からも国府多賀城と密接な関連性があると考えられる。



第3図 I期・Ⅱ期官衙遺構配置図

III 第94次調査

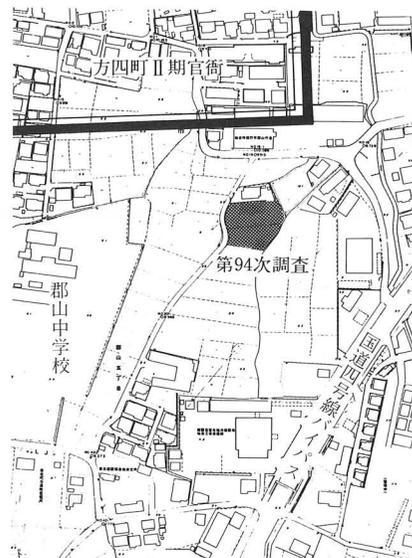
1. 調査経過

第94次調査区はII期官衙外郭南辺より南に80mほど離れた遺跡の東南部に位置している。これまで周辺の調査では、西に隣接した第65次調査で2間×10間の東西棟建物跡が3棟発見されており、南に隣接した第41次調査では溝跡、土壌、ピットなどが発見されている。

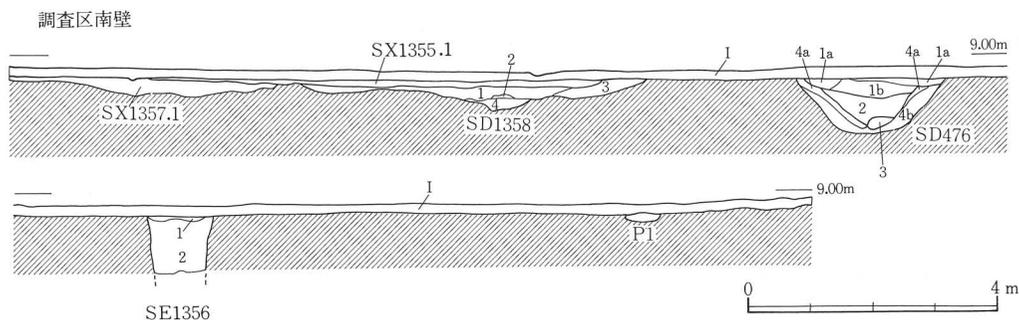
調査は宅地造成によって道路となる幅4m、長さ29mの部分に調査区を設定して行った。発掘調査は平成4年4月3日から開始し、4月24日に終了した。

2. 発見遺構と出土遺物

発見された遺構は、竪穴住居跡4軒、溝跡3条、井戸跡1基、性格不明遺構2などである。これらの遺構は水田の耕作土（第I層）の直下の第II層上面で検出されている。



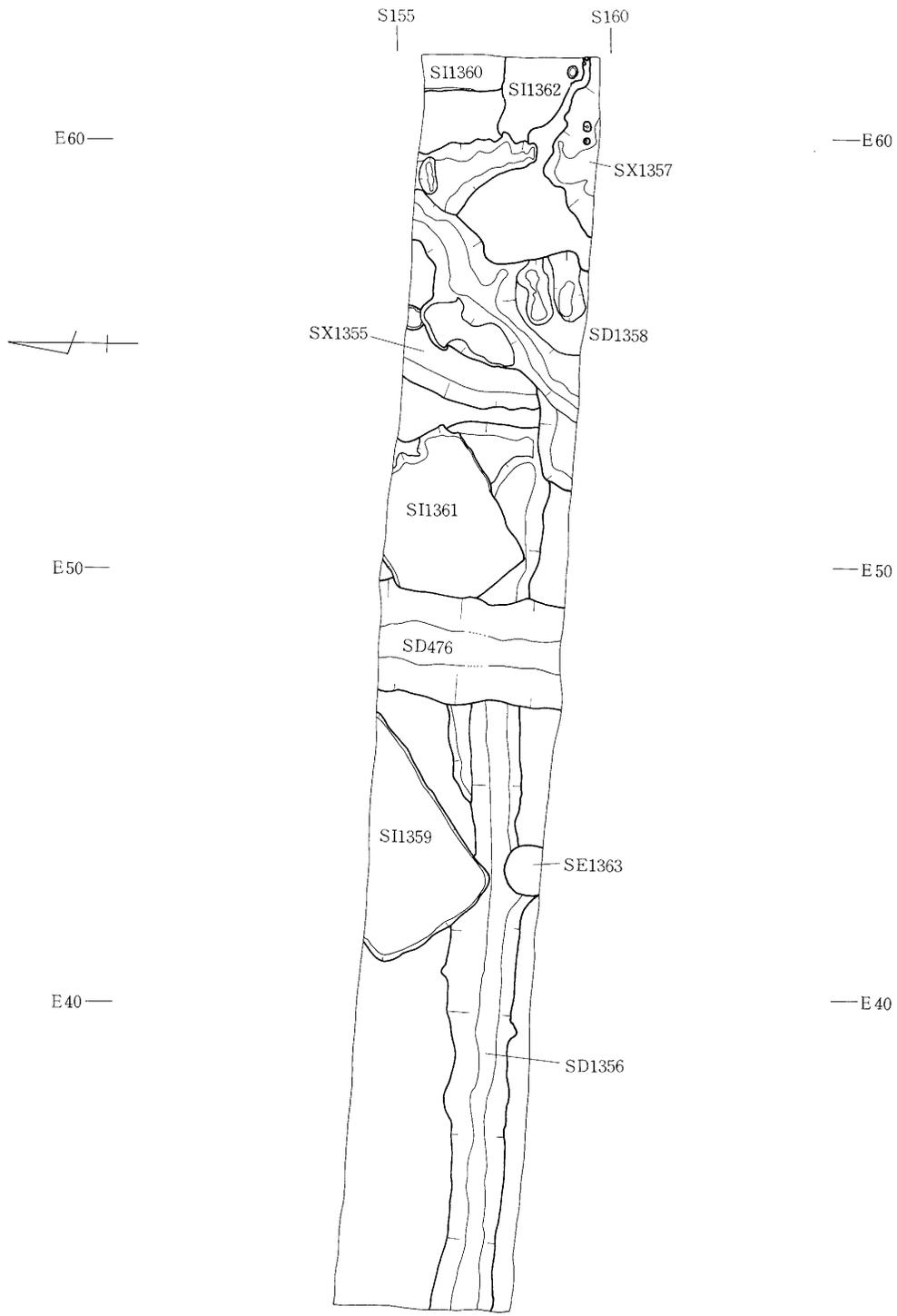
第4図 調査区位置図



層位	土色	土性	備考
I	10Y R3/2 黒褐色	シルト質粘土	旧耕作土
S X 1355			
1	10Y R4/3 におい黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄を多量に含む
S X 1357			
1	10Y R4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄を多量に含む
S D 1358			
1	10Y R5/2 灰黄褐色	シルト質粘土	
2	10Y R5/2 灰黄褐色	シルト質粘土	灰白色火山灰を多量に含む
3	10Y R5/3 におい黄褐色	シルト質粘土	
4	10Y R5/4 におい黄褐色	粘土質シルト	
P 1	10Y R4/6 褐色	粘土質シルト	

層位	土色	土性	備考
S D 476			
1 a	10Y R5/3 におい黄褐色	シルト質粘土	
1 b	10Y R4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	
2	10Y R4/2 灰黄褐色	シルト質粘土	
3	10Y R3/2 黒褐色	粘土	
4 a	10Y R5/4 におい黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄を多量に含む
4 b	10Y R4/3 におい黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄を多量に含む マンガンを含む
S E 1356			
1	10Y R3/4 暗褐色	シルト質粘土	
2	10Y R5/6 黄褐色	粘土質シルト	

第5図 調査区断面図



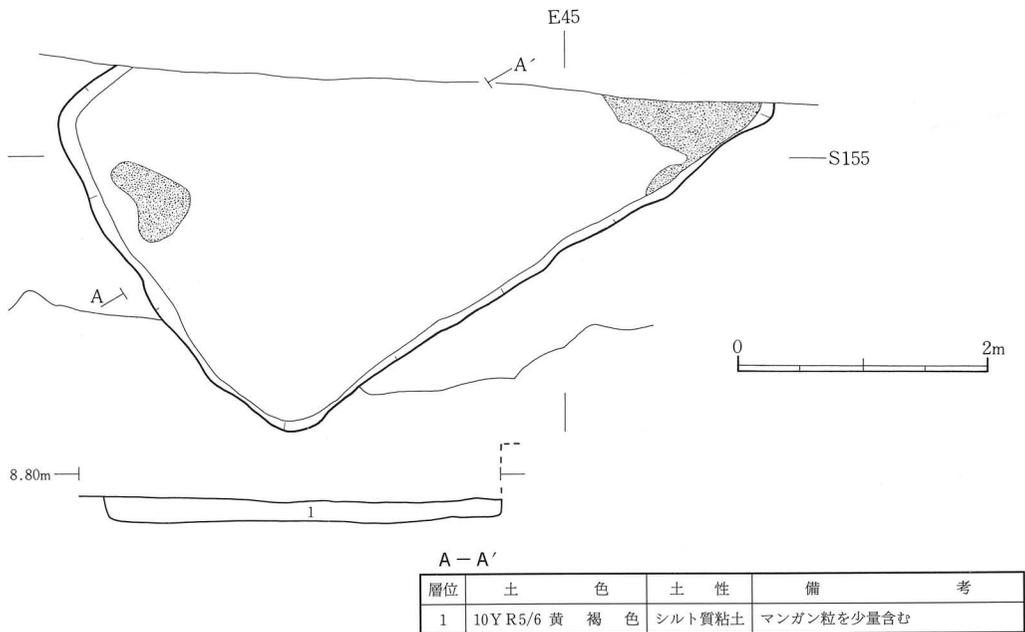
第6図 遺構配置図



S I 1359 竪穴住居跡 東西 5 m、南北 3.25 m の長方形の竪穴住居跡である。南辺方向で N - 50° - E である。残存する深さは 14 ~ 20 cm で、堆積土は 1 層である。遺構が保存されるため貼床上面までの調査にとどめている。床面上には炭化物が 2 箇所にとどめて分布している。カマド、柱穴は調査区内では検出されなかった。

遺物は堆積土、床面上から土師器坏、甕、須恵器甕片が少量出土している。

S D 1356 溝跡に切られている。

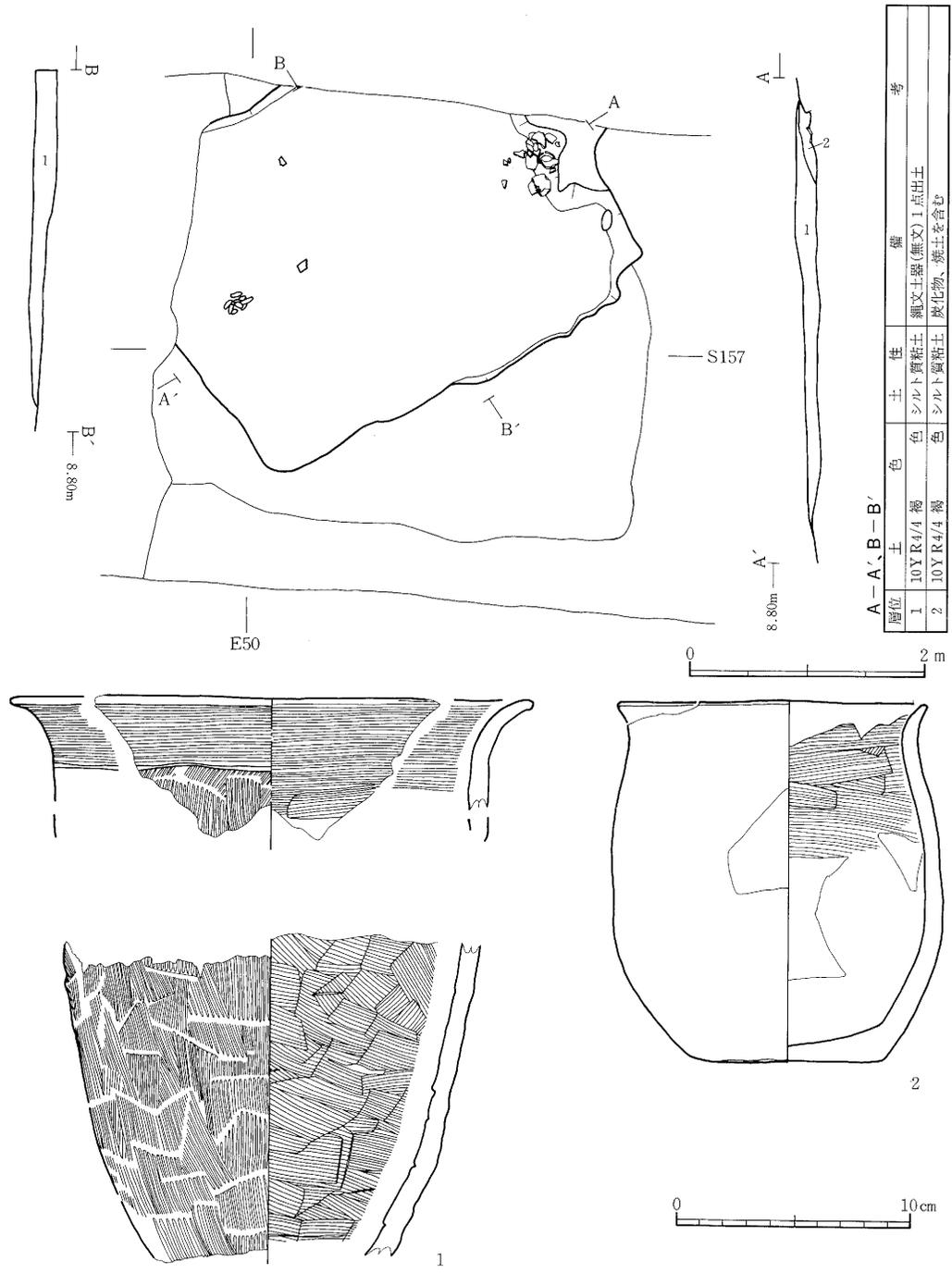


第 7 図 SI 1359 平・断面図

S I 1361 竪穴住居跡 東西 4.1 m、南北 3 m のほぼ方形の竪穴住居跡である。南辺方向で N - 54° - E である。残存する深さは 5 ~ 20 cm で、堆積土は 1 層である。遺構が保存されるため貼床上面までの調査にとどめている。床面上には 2 × 5 ~ 12 cm の礫が 9 個集積している箇所がある。カマドは東壁中に位置し、土師器甕が 3 個体集中して出土している。柱穴は検出されなかった。

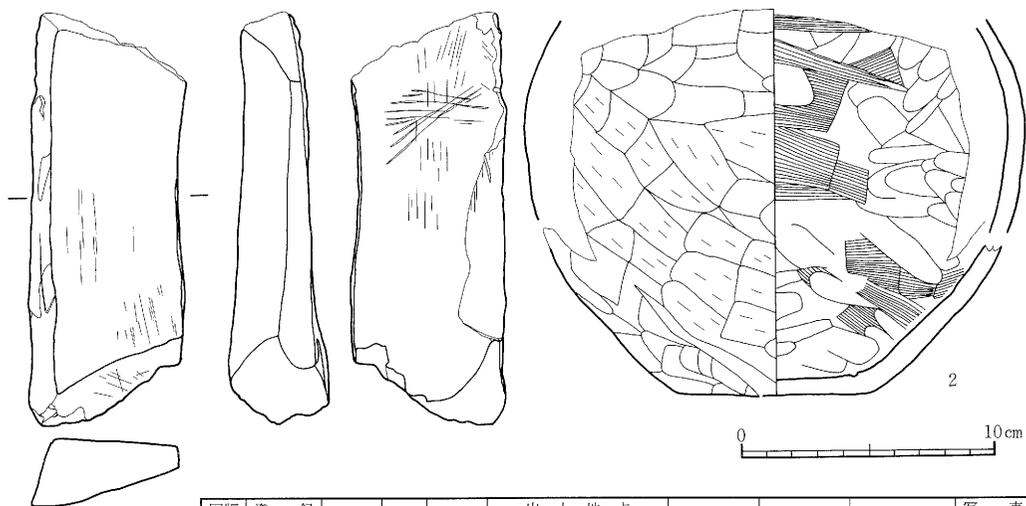
遺物はカマド内より土師器 C - 713 甕、C - 714 甕 (第 8 図 2、1)、C - 715 甕 (第 9 図 2)、床面上から石器 K - 23 砥石 (第 9 図 1)、その他堆積土も含め土師器坏、甕片、須恵器甕片が少量と縄文土器片 (無文) が 1 点出土している。土師器 C - 713 甕は小型の甕で外面の摩滅が著しいが、底部外面には木葉痕が見られる。土師器 C - 714 甕は長胴形の甕で外面のハケメ調整が顕著である。土師器 C - 715 甕は球形の甕である。

S D 1356、S D 476 溝跡に切られている。



図版番号	登録番号	種別	器形	部位	出土地点			外面調整	内面調整	備考	写真版
					地区	遺構	層位				
1	C-714	土師器	甕	口縁部 ~体部	94次	S I 1361	カマド	(口縁部)ヨコナデ (体部)ハケメ	(口縁部)ヨコナデ (体部)ヘラナデ		9
2	C-713	土師器	甕	口縁部 ~底部	94次	S I 1361	カマド	磨滅	ヘラナデ		10

第8図 S I 1361平・断面図、出土遺物(1)

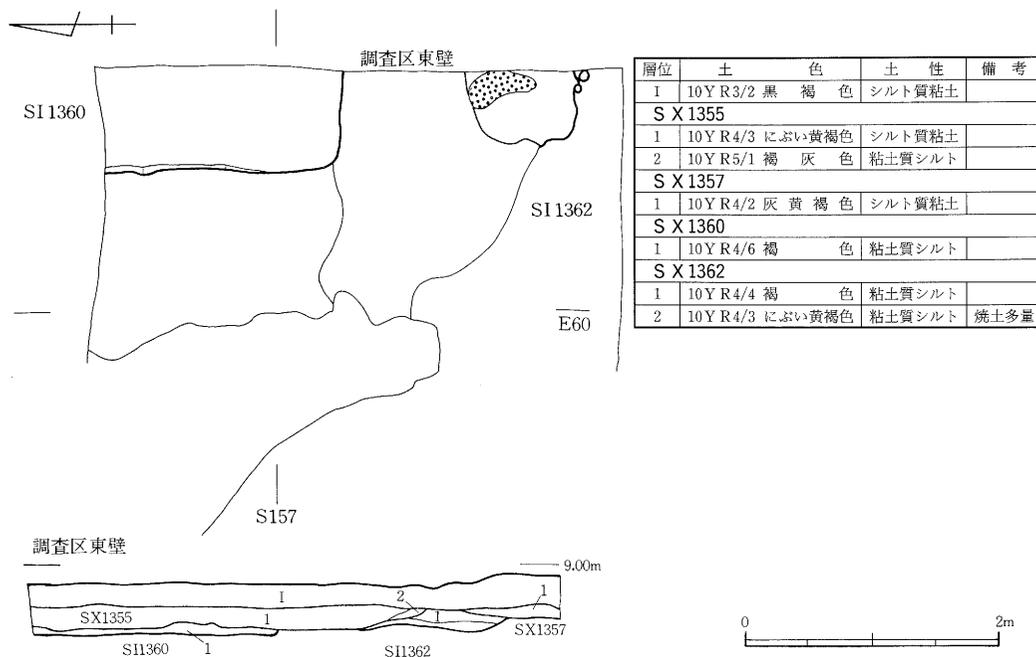


図版 番号	登録 番号	種別	器形	部位	出土地点			外面調整	内面調整	備考	写真 真版
					地区	遺構	層位				
1	K-23	石器	砥石	-	94次	S I 1361	床面	(長さ16.3cm、幅5.65cm)			
2	C-715	土師器	甕	体部 ~底部	94次	S I 1361	カマド	ヘラケズリ	ヘラケズリ ヘラナデ		11

第9図 SI 1361出土遺物(2)

S I 1360竪穴住居跡 東西0.85m以上、南北1.85m以上で竪穴住居跡の南西隅を検出したと推定される。西辺方向でN-7°-Wである。残存する深さは3~9cmで、堆積土は1層である。削平が著しい。遺物は出土しなかった。

S I 1362竪穴住居跡を切り、S X 1355性格不明遺構に切られている。



第10図 SI 1360、1362平・断面図

S I 1362 竪穴住居跡 東西 2 m 以上、南北 2 m 以上の竪穴住居跡の一部を検出した。残存する深さは最大で 15 cm で、貼床と掘り方の一部のみである。堆積土は 2 層で第 2 層下面が床面である。床面上で焼土が集中している箇所がある。

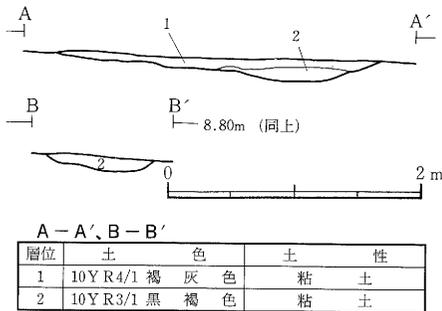
遺物は床面上から土師器杯、甕片が少量出土している。

S X 1355 性格不明遺構、S I 1360 竪穴住居跡、S D 1358 溝跡に切られている。

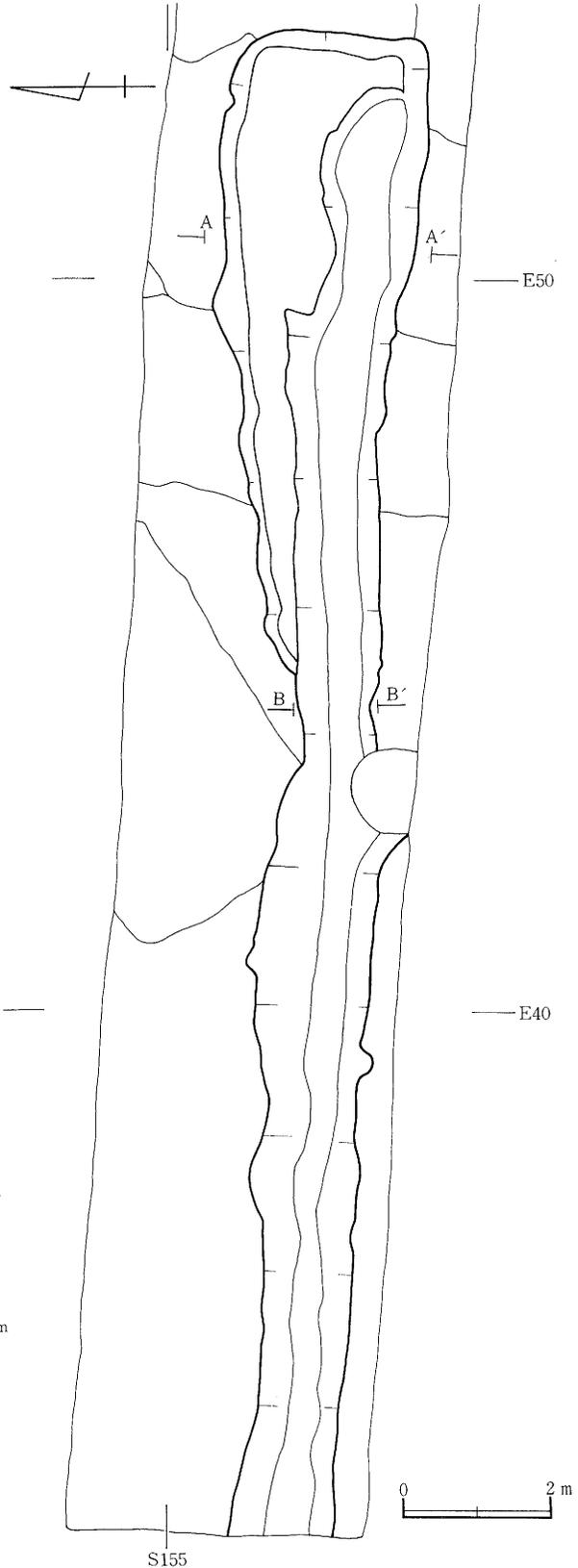
S D 1356 溝跡 総長 20.5 m 以上で、E-4°-N のほぼ東西方向に延びる溝跡である。上幅 100~290 cm、下幅 26~75 cm、深さ 10~22 cm、底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がり東部において中段でほぼ平坦な箇所がある。堆積土は 2 層である。

遺物は堆積土中から土師器杯、甕片、須恵器蓋、甕片が出土している。

S I 1359、1361 竪穴住居跡、S D 476、1358 溝跡、S E 1363 井戸跡を切っている。



第11図 S D 1356 平・断面図



S D 1358溝跡 総長 6 m 以上で、N-43°-E の方向に延びる溝跡である。上幅115~315cm、下幅20~100cm、深さ24~33cm、底面はほぼ平坦であるが壁が上半部で乱れ、形状が一定していない。堆積土は 4 層である。第 2 層中には灰白色火山灰を多量に含んでいる。

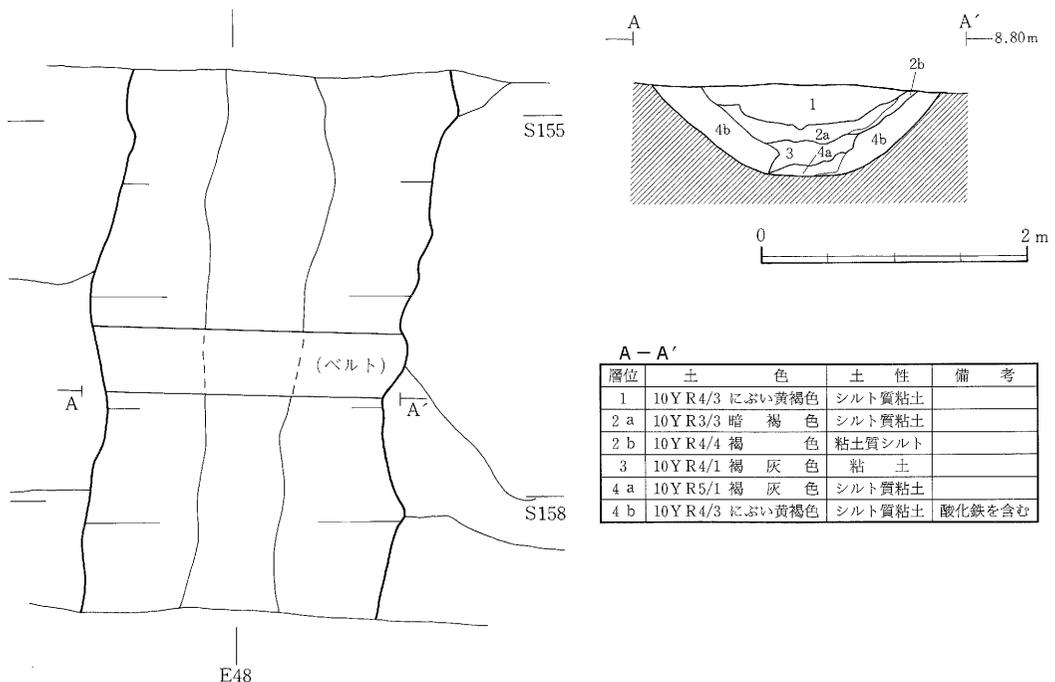
遺物は堆積土と底面から土師器坏、甕片、須恵器甕片が出土している。なお堆積土中からロクロ使用の土師器坏で回転糸切り無調整の底部片が 1 点出土している。

S I 1362 竪穴住居跡を切り、S D 1356 溝跡、S X 1355 性格不明遺構に切られている。

S D 476溝跡 総長4.25m 以上で、N-2°-W のほぼ南北方向に延びる溝跡である。上幅220~270cm、下幅60~97cm、深さ70~80cm、底面はほぼ平坦で、壁は直線的ではあるが緩やかに立ち上がる。堆積土は 4 層である。

遺物は堆積土中から土師器坏、甕片、須恵器甕片が少量出土している。

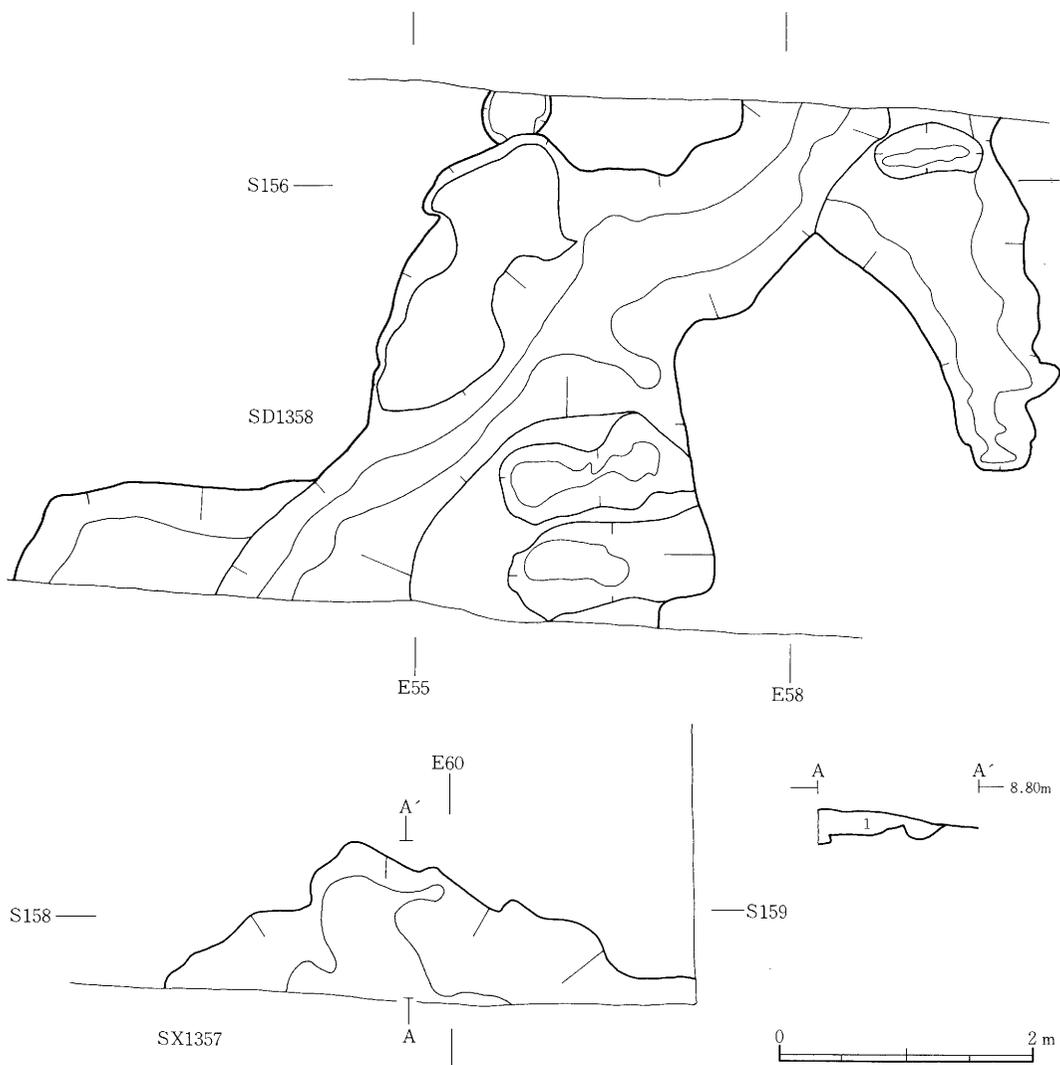
S I 1361 竪穴住居跡を切り、S D 1356 溝跡に切られている。南に隣接する第41次調査で検出している S D 476 溝跡と合わせると長さ45m 以上になる。



第12図 S D 476 平・断面図

S E 1363井戸跡 直径115cmの円形で、深さ90cm以上、壁は垂直に立ち上がっている。堆積土は 2 層以上である。崩落の危険があるため、底面までの掘下げを行わなかった。

S D 1356 溝跡に切られている。



第13図 S X 1357・S D 1358平・断面図

S X 1357 調査区東南隅において検出され東西4.35m以上、南北1.2m以上、深さ4～8cmで、底面は凹凸がある。堆積土は1層で、10Y R4/4褐色シルト質粘土である。

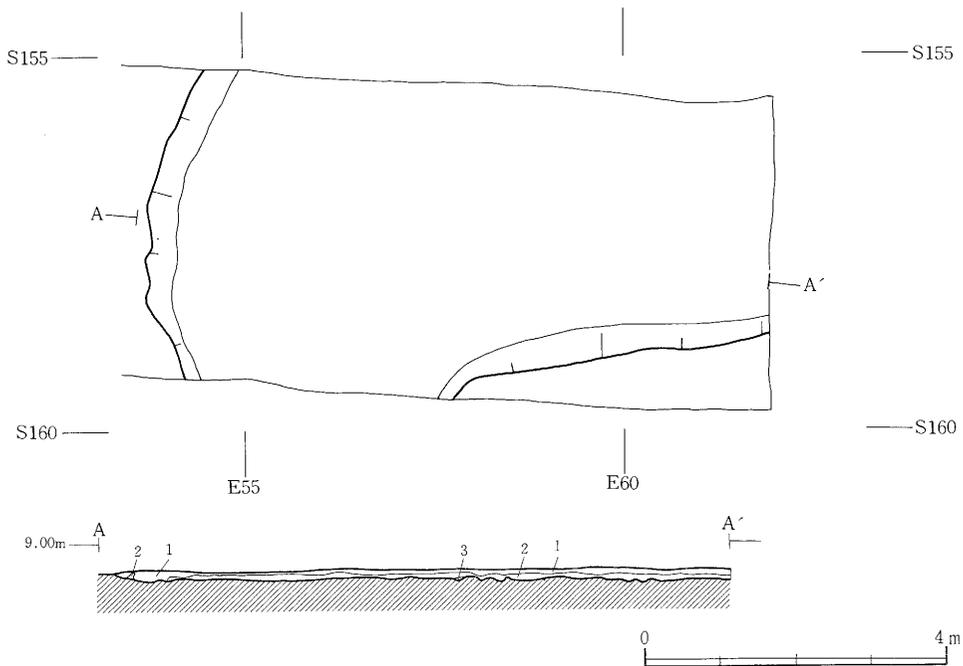
遺物は堆積土中から土師器坏、甕片、須恵器甕片が出土している。

S X 1355性格不明遺構に切られている（第6、14図参照）。

S X 1355 調査区東端において検出され東西8m以上、南北4m以上、深さ9～18cmで、底面はやや凹凸がある。堆積土は3層である。

遺物は堆積土中から土師器坏、甕片、須恵器坏、甕片が出土している。

S I 1360、1362竪穴住居跡、S D 1358溝跡、S X 1357性格不明遺構を切っている（第6図参照）。



層位	土色	土性	備考
1	10Y R3/4 暗褐色	シルト質粘土	
2	10Y R3/3 暗褐色	粘土	
3	10Y R4/4 褐色	粘土	酸化鉄を多量に含む

第14図 S X 1355平・断面図

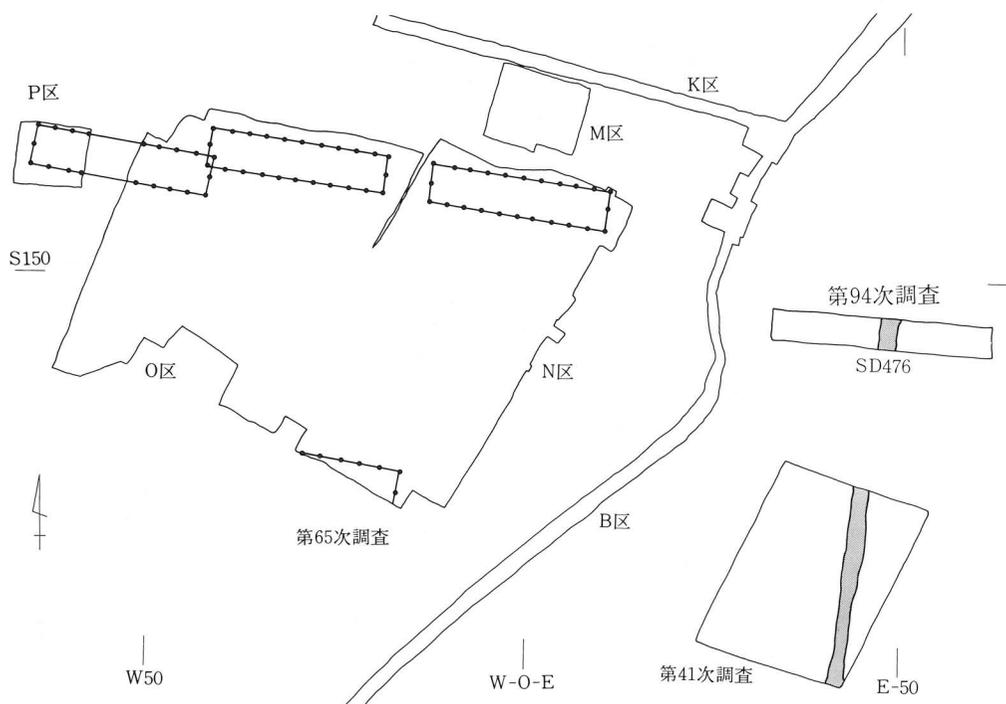
遺構・層位	層位・細部	細文土器	土師器(非ロクロ)		土師器(ロクロ)		須恵器			石器	瓦
			坏	甕	坏	坏	甕	蓋	壺		
基本層位I層中	-	0	3	81	0	0	11	0	0	0	1
基本層位II層上面	-	0	3	33	0	0	4	0	1	0	0
S I 1359	1	0	10	116	0	0	1	0	0	0	0
	床面	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0
S I 1361	1	1	6	83	0	0	3	0	0	0	0
	床面	0	0	9	0	0	0	0	0	0	0
	カマド	0	0	5	0	0	0	0	0	0	0
S I 1362	床面	0	4	5	0	0	0	0	0	0	0
SD 476	1~4	0	6	51	0	0	1	0	0	0	0
SD 1356	1	0	1	51	0	0	12	0	0	0	0
	2	0	1	118	0	0	6	1	0	0	0
	底面	0	5	43	0	0	6	0	0	0	0
SD 1358	1~4	0	8	93	1	0	17	0	0	0	0
	底面	0	1	42	0	0	5	0	0	0	0
S X 1355	1	0	7	87	0	0	8	0	0	0	1
	2	0	11	76	0	0	10	0	0	0	0
S X 1357	1	0	1	29	0	0	3	0	0	1	0
合計		1	67	925	1	0	87	1	1	1	2

第1表 出土遺物(破片)集計表

3. ま と め

今回の調査では竪穴住居跡4軒、溝跡3条、井戸跡1基、性格不明遺構2などが発見された。そのうち竪穴住居跡ではS I 1361から器形や細部の調整が明らかな遺物が出土している。S I 1361から出土したのは土師器甕で、小型の甕(C-713)、長胴形の甕(C-714)、球形の甕(C-715)の3点である。長胴形の甕の器形や調整の特徴、およびこれが小型や球形の甕と共伴する様相は、栗罎式の代表的な土師器とされている仙台市栗遺跡第12号住居跡(註8)や、8世紀前半代と考えられる郡山遺跡第35次調査S E 429井戸跡(註9)出土土師器のあり方に類似している。したがって出土した土師器甕から検討すると、S I 1361についてはほぼ7世紀～8世紀前半代の年代が考えられる。またS I 1359、1361は住居の南壁方向が真北から50°かややそれより東に振れている。これまでの調査で住居跡の方向性がこのような振れを示す例はなく、I期官衙やII期官衙の内部に位置している竪穴住居跡や竪穴建物跡(註10)とは違いが見られる。S I 1360やS I 1362については遺構のごく一部を検出しただけであり、残存状況も良好でないため詳細は明らかにできなかった。したがって官衙外での竪穴住居のあり方については、今後の調査例の増加をまって検討する必要がある。

S D 476はII期官衙の基準方向と同じほぼ真南北方向で、第41次調査(註11)と合わせると全長が45m以上にも及ぶものである。さらに官衙廃絶期以降の遺物が出土していないことから、II期官衙と密接な関連があると推定される。官衙南面の地割を示す区画の溝や、東に隣接する



第15図 周辺調査区位置図

第65次調査で検出したS B1306、1320などの長大な建物群の東端を区画する溝の可能性も考えられる。なおS D476をII期官衙の時期とみれば、先に述べたS I1361はII期官衙以前の遺構となり、方向性の類似するS I1359についても同様の可能性が指摘されることになる。

性格不明遺構としたものの中でS X1355の土壌は、第65次、第93次調査で検出している水田跡の耕作土に類似している。畦畔等の遺構は検出されなかったが、水田跡の痕跡を示している可能性がある。

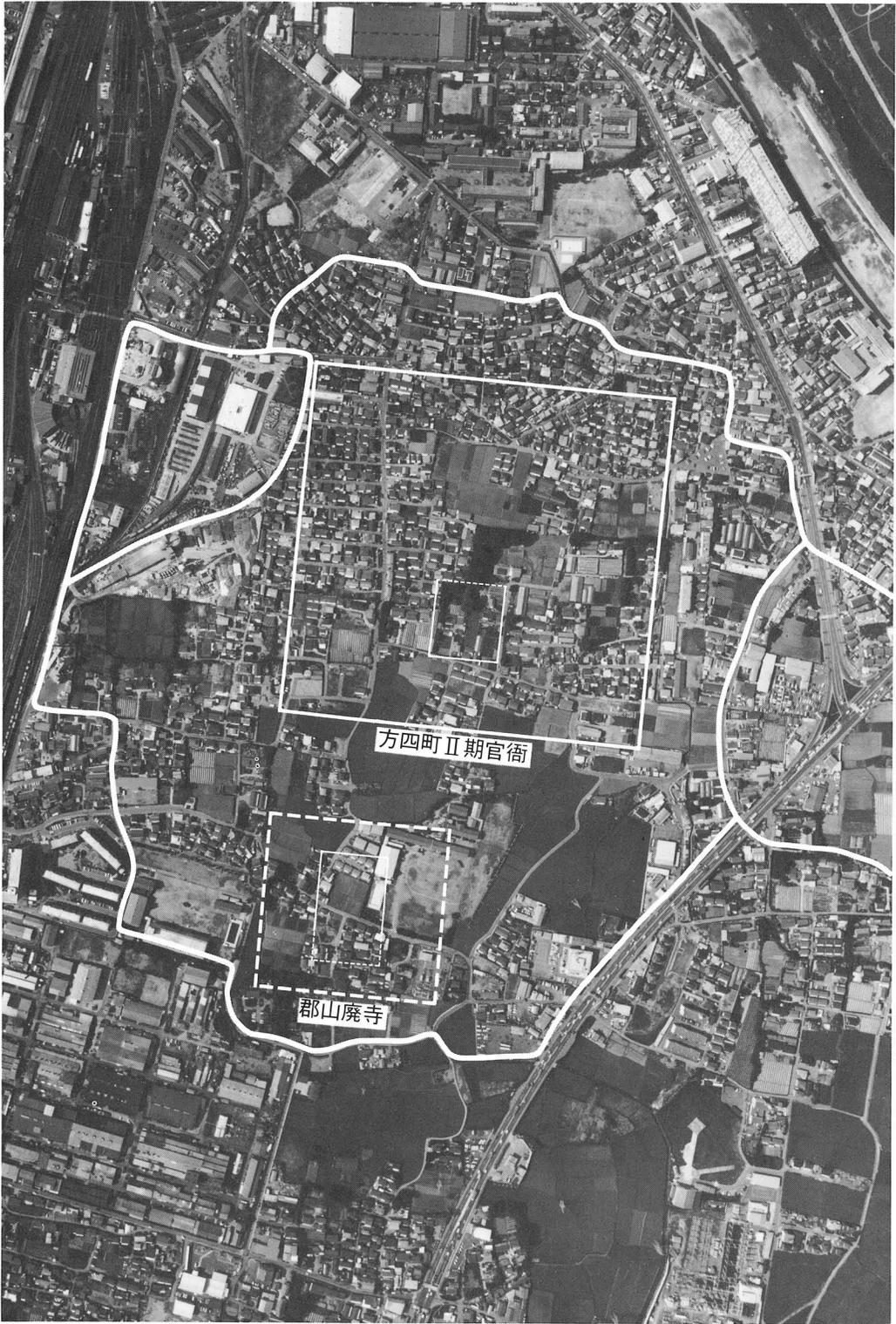
註

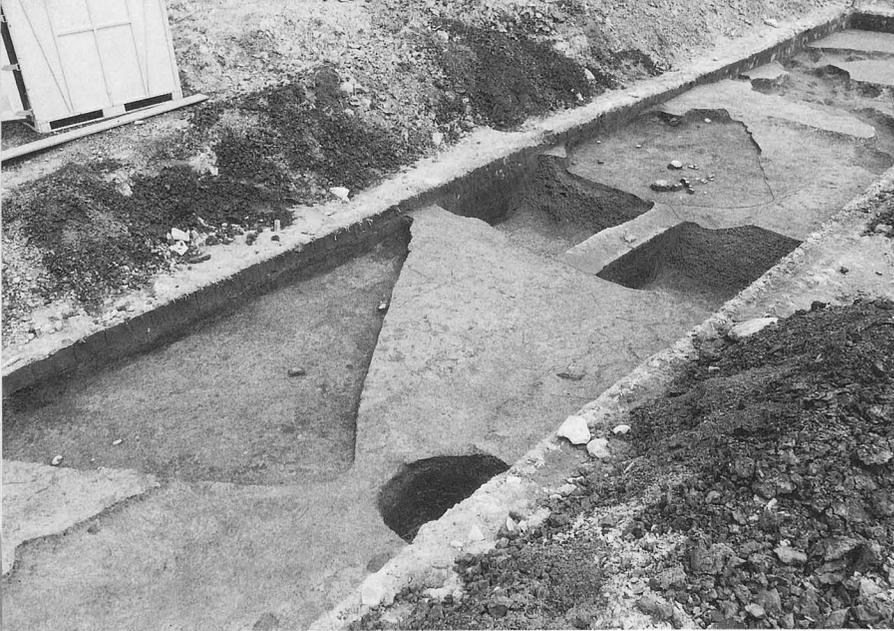
- 註1 山中 樵「漆液を容れたる陶器」『考古学雑誌』第5巻第5号 1915.1
- 註2 内藤政恒「東北地方発見の重瓣蓮花文鏡瓦についての一考察(下)」『寶雲』第22冊 1938
- 註3 石田茂作・原田良雄『東北古瓦図録』雄山閣 1974.2.1
- 註4 東北大学文学部『考古学資料図録』2 第一法規 1982.3.31
- 註5 伊東信雄「仙臺市内の古代遺跡」『仙台市史』 第3巻別編1 1950.8.20
- 註6 註5に同じ
- 註7 第17回古代城柵官衙遺跡検討会資料 1991.2
- 註8 仙台市文化財報告書第43集 栗遺跡 1983.8
- 註9 「郡山 IV」 第35次調査 1984.3
- 註10 「郡山 VI」 第55次調査 P62 1986.3
- 註11 「郡山 IV」 第41次調査 1984.3

参 考 文 献

- 仙台市文化財調査報告書第23集「年報1」『郡山遺跡発掘調査概報』1980
- 仙台市文化財調査報告書第29集「郡山遺跡I」1981.3
- 仙台市文化財調査報告書第38集「郡山遺跡II」1982.3
- 仙台市文化財調査報告書第42集「郡山遺跡—第13次」1982.3
- 仙台市文化財調査報告書第46集「郡山遺跡III」1983.3
- 仙台市文化財調査報告書第64集「郡山遺跡IV」1984.3
- 仙台市文化財調査報告書第74集「郡山遺跡V」1985.3
- 仙台市文化財調査報告書第86集「郡山遺跡VI」1986.3
- 仙台市文化財調査報告書第96集「郡山遺跡VII」1987.3
- 仙台市文化財調査報告書第110集「郡山遺跡VIII」1988.3
- 仙台市文化財調査報告書第124集「郡山遺跡IX」1989.3
- 仙台市文化財調査報告書第133集「郡山遺跡X」1990.3
- 仙台市文化財調査報告書第145集「郡山遺跡—第84・85次—」1990.6
- 仙台市文化財調査報告書第146集「郡山遺跡XI」1991.3
- 仙台市文化財調査報告書第161集「郡山遺跡XII」1992.3
- 仙台市文化財調査報告書第169集「郡山遺跡XIII」1993.3

写 真 图 版





図版 2
第94次調査区
全 景



図版 3
S I 1361 全景

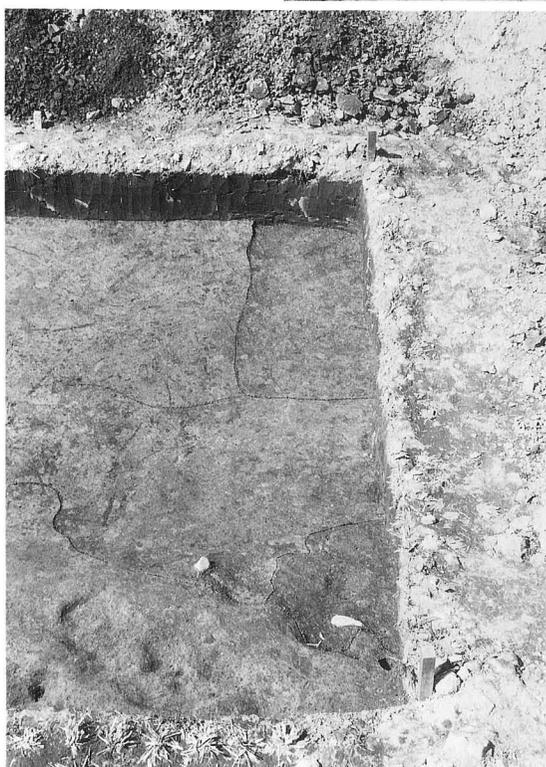
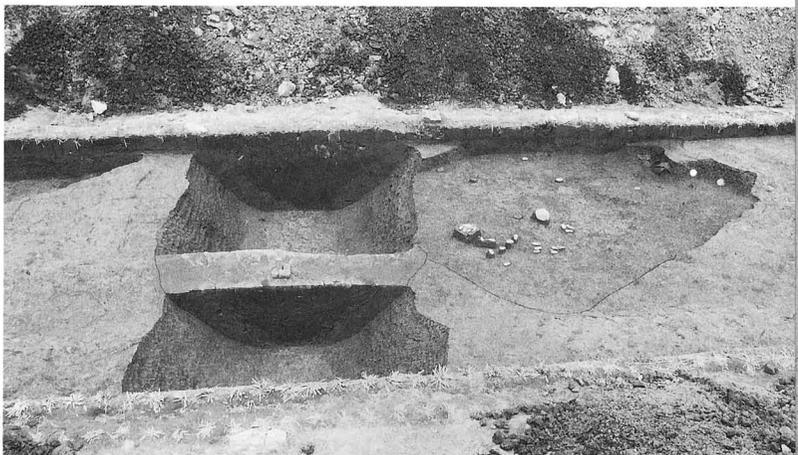


図版 4
S I 1361
遺物出土状況

图版 5
S I 1359全景



图版 6
S D 476 · S I 1361



图版 7 S I 1360 · S I 1362

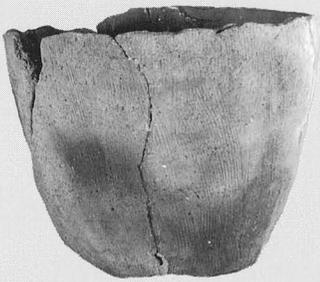


图版 8 S D 1356

図版9
C-713 甕



図版10
C-714 甕



図版11
C-715 甕



文化財課職員録

課長 白鳥 良一

管理係

係長 菅原 澄雄

主任 村上 道子

主事 福井 健司

主事 庄司 厚

主事 齋藤 英治

主事 佐藤 寿江

調査第一係

係長 田中 則和

主任 木村 浩二

教諭 佐藤 好一

主任 吉岡 恭平

主事 金森 安孝

教諭 小川 淳一

主事 工藤 哲司

主事 主浜 光朗

主事 斎野 裕彦

主事 長島 榮一

教諭 稲葉 俊一

教諭 菅原 裕樹

主事 渡部 紀

教諭 川名 秀一

教諭 熊谷 裕行

調査第二係

係長 結城 慎一

主任 篠原 信彦

教諭 太田 昭夫

主任 佐藤 洋

主事 佐藤 甲二

主事 渡部 弘美

主事 工藤信一郎

主事 荒井 格

主事 中富 洋

主事 平間 亮輔

教諭 五十嵐康洋

教諭 神成 浩志

教諭 赤澤 靖章

教諭 竹田 幸司

主事 佐藤 淳

仙台市文化財調査報告書第177集

平成5年度

郡山遺跡

——第94次発掘調査報告書——

平成5年6月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町3-7-1

印刷 (株)東北プリント

仙台市青葉区立町24-24 TEL 263-1166

